

プラトン『テアイテトス』における数学と哲学

松井 貴英

1 はじめに

プラトンが自身の哲学を作り上げていくにあたり、数学（もちろん幾何学も含む）からの影響がみられるのは、よく知られている。特に、知識獲得や認識に関わる面において、その影響が強くみられるようにも思われる。たとえば、『メノン』における召使の少年による想起の実演⁽¹⁾、仮設の前提に基づいた探究、根拠の思考⁽²⁾や、『パイドン』における魂の浄化に関する問答での *διάνοια* や *λογισμός* 系の語の使用や想起説、また対話相手がピュタゴラス派の影響を受けた者であるシミアスであること、『国家』における線分の比喩、『テアイテトス』における主要登場人物がテオドロスと若き天才数学者テアイテトスであり、この対話篇ではテオドロスが 17 まで具体的に逐一示すのみで終わった通約不能な数に関する問題を証明したというエピソードが序盤で述べられるといったことから、明らかであるといえよう。このように、プラトンは、数学に所縁のある登場人物を登場させたり、数学をエピソードとして用いたり、さらにはそれに関わることであるが、プラトン自身の哲学探究、特に知識獲得のための探究の方法に数学を採用したりしている。

本論文では、『テアイテトス』において数学が「知識とは何か」という哲学探究にどのように関わっているかを、主に第二部における虚偽の思いなしの成立の可能性に関する検討をしつつ行っていく。特に、この箇所が仮設の前提に基づく探究であり、間接的証明がなされていることを示すことを目指す。その上で、なぜこの箇所においてそれがなされているかを検討する。そのような考察を通して、プラトンにおける哲学探究と数学の探究の関わりについて考える。その際、『テアイテトス』には登場しないけれども、プラトンの知識獲得理論である想起説や、仮設の前提に基づいた探究といったものに関しても、適宜言及していくこととなる。

2 『テアイテス』第二部の構成

まずは『テアイテス』第二部における対話の展開を概観していこう。ここでは、まず知識の対象が「思いなすこと」とであるとされる。しかし思いなしには虚偽のものもあるので、すべての思いなしが知識であるとはいえず、思いなしの真なるものが知識なのかもしれない(187a-b)という、テアイテスの発言により探究が進められる。続けて、ソクラテスは「虚偽を思いなすこと」という難問があり、それを放置すべきか考察すべきかどうかで思い悩んでいると述べる。テアイテスは、ソクラテスのその発言に対して、考察すべきであると返す(187d)。そして、虚偽の思いなしの成立の可能性についての検討が始められる。

そして、この問題の検討に先立ち、「知っている」ことと「知らない」ことの間にある「学ぶ」とか「忘れる」とかは、さしあたり問題の外においておくこととすることがソクラテスから提案され、テアイテスはそれに了解する(188a)。

この探究においてこの後、知っているか知らないかについての問題の分類と検討がなされる(187e-190e)。次に、感覚の対象に関する虚偽の思いなしの成立の可能性の検討が蠟の刻印の比喻を用いるなどしつつ展開され(190e-195b)、続いて思考の対象に関する虚偽の思いなしの成立の可能性の検討が鳩小屋の比喻が示されつつ続けられる(195b-199c)ものの、最終的にその可能性を見出すことができず、問答は困難に陥る(199c-200d)。そして、「真なる思いなしが知識である」のかどうかの検討に立ち返り、裁判における証言の譬えにより、真なる思いなしと知識は異なるものであることが示される(200d-201c)。

このように、第二部における対話の大半は虚偽の思いなしの成立の可能性に関する対話が占める。これに関しては、この対話全体に関しても個別の内容に関しても、幾つもの疑問点が挙げられるが、その中から、本論文では、この対話はいかなる(方法を用いてなされている)ものであるのか、なぜこのような対話がここに置かれたのかといった、対話全体に関する問題を扱う。

それらの問題の検討のため、話が始められるきっかけとなった発言、そして実際に対話が始められる際にソクラテスにより述べられる前提、これらふたつのソクラテスの発言とそれに続くテアイテスの返答、さらにはこの対話が結論づけられる際のソ

クラテスの発言が、この検討において重要な点となる。まずはこれ以降で、187c-dにおける虚偽の思いなしの成立の可能性の探究を放置すべきかどうか思い悩んでいる発言と、それをすべきだとするテアイテトスの発言、そして探究の冒頭での「知っている」ことと「知らない」ことに限定するというソクラテスの発言と、それを認めるテアイテトスの発言は、どのような意図をもってここで述べられているのかを検討していくとしよう。

3 探究の出発点

テアイテトスが、思いなしの真なるものが知識であるかもしれないと述べ(187b)、それについてソクラテスが確認のために問い、テアイテトスが肯定した後、ソクラテスは、思いなしというものについて、そもそもこういうのを再び取り上げるというのはまだなお意味のあることだろうかといった自問をする。そして

ソクラテス 「それは何か虚偽を思いなすことなのだ。今もまだ決心がつかず迷っていて、考えているのだが、これにはもう手を触れない方がいいだろうか。それとも、少し前のとはまた別の仕方での考察をした方がいいだろうか」

テアイテトス 「何を言っているのですか、ソクラテス、ちょっとでもその必要があると見えるのであれば、そうするよりほか、何が一体あるのでしょうか。というのは、先ほどあなたとテオドロスさんとで、今ここでしているような事柄には何ひとつ先を急がなければならないようなものはないということを、時間の真の余裕というものについておっしゃっていましたが⁽⁹⁾、確かに間違ってお話ではなかったのですからね」

ソクラテス 「よく思い出したね。前の道に戻るのも正しいことだろう。というのも、小さいものでもよくやるほうが、多くのものを不十分にやるよりもいいことだからね」

テアイテトス 「たしかに」

という会話がなされる。(187d-e)

ソクラテスは、テアイテトスのこの発言に促され、「少しのものでもよく仕上げる方が、多くを不十分にやるよりはましではないか」と思うとして、この探究を共に始めることに決める。

このようなソクラテスによる唐突な発言とそれに肯定的に合いの手を入れるテアイテトスとの会話により、虚偽の思いなしの成立の可能性の検討は始められる。第一部でソクラテスとテオドロスが虚偽の思いなしに関する対話をしている⁽⁴⁾が、テアイテトスとはこの問題に関しては初めての対話であることや問答における内容が異なっていることから⁽⁵⁾、テオドロスとの対話の単なる焼き直しではないと解されよう。もし第二部におけるソクラテスとテアイテトスとの問答が、173b-177cにおけるソクラテスとテオドロスの問答の単なる焼き直しであるとすれば、ソクラテスは「今もまだ決心がつかず迷っていて、考えている」とは述べることなく、「先ほどテオドロスと問答したように、正しきや幸福といったものものそのものに関する考察をするとなった場合に、知を求めない者はまごついてしまうものなんだよ」などと言いながら、展開を先へ進めようとするだろう。そうではなく、ソクラテスは「まだ迷って」いて、テアイテトスに「ちょっとでもその必要があると見えるのであれば、そうするよりほか、何が一体あるのでしょうか」と問答することを促され、ソクラテスがそれに同意しているのであるから、173b-177cにおけるソクラテスとテオドロスの問答を念頭に置きつつも、ここから新たな問答の局面が展開されると解する方が妥当であるように思われる。

さて、このような唐突な会話により新たな探究がなされる展開は、『メノン』における仮設の前提に基づいた探究が開始される箇所に類似しているようにも思われる。『メノン』においては、想起の実演により探究することが可能であることを示したソクラテスは、「徳とは何か」の探究を再開することをメノンに対して提案するが、メノンは、「徳は教えられうるものか」の探究を進めていきたいと答える。それを聞いたソクラテスは、唐突に、長々と発言する。その発言において重要なのは、次の発言(86c)であろう⁽⁶⁾。

ソクラテス 「少しだけでも私に対する支配を緩めてくれないだろうか。もしそうし

てくれるならば、徳は教えられるものかそれともほかの方法で得られるものかについて、仮説を立てて探究を進めることを認めてほしいのだ。私が仮説から探究するというのは、ちょうど幾何学者たちがよく用いる、あの方法なのである」

このソクラテスの発言は、例として挙げた幾何学の問題の説明をし、それは、徳は教えられうるかの探究においても用いられるとして、仮設の前提に基づいた探究によりそれが進められようとする一連の長い発言の一部である。そして、この発言以降、メノンも仮設から探究する対話の中で返答をしていく。

『メノン』においては、メノンはソクラテスが上記の発言のような「ソクラテスに対する支配」を緩めたことについては特に返答をしないが、この先も、探究のパラドクスを述べた時のようにソクラテスに対して論争的な態度をとるようなこともなく、この探究をソクラテスと共に進めているのであるから、ソクラテスが開始した仮設の前提に基づいた探究に従いながら返答をしているといえよう。その点で、メノンはこのソクラテスの提案に同意しているといえるし、この仮設の前提に基づいた探究は、両者の了解のもとで進められていると解されよう。この箇所はそのことが象徴的に表れている箇所であり、仮設の前提に基づいた探究は、対話するものの中でその仮設に関する同意がなければ探究を進めることができないものであることが象徴的に表れている箇所であるといえよう⁷⁾。

では、先述のソクラテスとテアイテスの会話（187d）においてはどうか。この箇所においてソクラテスは、虚偽の思いなしの成立の可能性の検討を始めたいけれども決心がつかないような心情を遠回りに述べている。テアイテスは、探究の必要があるならそれを進めていく他に何かあるのかとソクラテスに対して返答をする。この会話は、直接的にソクラテスがテアイテスに対して「虚偽の思いなしの成立の可能性の検討を始めることを認めてほしい」と述べているわけではない。しかし、この展開は、『メノン』86eにおけるソクラテスの発言ほどには典型的ではないけれども、（たとえこの場においてではなくても）虚偽の思いなしについて探究したいと思っているソクラテスに対して、それをすることにテアイテスが同意し、それにより探究が始められるというこの構図は、探究の出発点において対話するもの同士による双方

の同意がなされた会話であると解することができる。

ところで、この探究がここで差し挟まれていることの唐突さが問題とされることも多いが、その点に関する解釈については、本論文の後半で考察していく予定である。

4 前提として置かれた条件

ソクラテスとテアイテス双方の同意により始められることとなった虚偽の思いなしの成立の可能性の検討の開始時点において、次のような前提が示される。

ソクラテス 「さてところで、もののすべてについても、またものそれぞれの場合にしても、ただ我々にとっては次のようではないか。すなわち、知っているか、あるいは知らないかである。というのは、学ぶとか忘れるとかということは、これをこれらの中間にあるものとして、さしあたり問題にしないでしておこう。今のところ、我々の言論には少しも関係がないからね」

テアイテス 「いや、ソクラテス、それを知っているか知っていないかという以外に各々のものについては、他のいかなる場合も残されてはいません」
(188a)

「知っているか、あるいは知らないか」というこの前提は、一見すると、この第二部の探究において、ある意味で足枷であるかのように機能しているようにも思われよう。それは、この「その中間の状態は考慮せず、知っているか知っていないかのみを前提とする」という条件により、第二部におけるこの探究が破綻しているように見えるからである。それはすなわち、この条件がこの探究が困難に陥る原因であるようにみえるということである。プラトンの哲学に慣れ親しんでいる者であったり、あるいは彼の対話篇の熱心な読者であったりすれば、考慮の外に置かれた「学ぶ」とか「忘れる」とかに言及されることによって、この時点で想起説を思い起こす可能性もあるだろう。より具体的には、『メノン』81c-eにおいて述べられている、「端的に言って探究するか学ぶというのは想起である」という命題や、想起に関する言説として提示

されている「生まれる前に魂は知識を持っていたが、生まれた時に忘れてしまう」という説明を思い出している可能性もある。

プラトンにおける知識獲得の理論である想起説がこの前提が示されることで用いることができないようになったことは、この対話篇執筆の時点でプラトンが意図したことでもあると解釈することもできるだろう。そしてもしプラトンがそのようなことを織り込み済みでこの前提をソクラテスに語らせたとする解釈が無理筋ではないならば、ここでプラトンが意図していたことには少なくとも次の二点があるといえよう。それはもちろん、プラトンがこの時点で想起説を捨てたということではない。そう解せるのは、先の 173b-177c におけるソクラテスとテオドロスとの問答における高みに上る話に『国家』における洞窟の比喩との親和性を見て取ることができることと、そして洞窟の比喩において洞窟の中に囚われていた者が洞窟から出てきて、最初のうちはあまりのまぶしさにめまいがするものの、目が慣れてくることにより真実在を見ることができるようになるというくだりが想起を連想させることから、妥当なことであるように思われる。

この時点でのプラトンの意図として解されることとしては、ひとつは、ある意味で足枷であるかのようなこの前提は「仮設の前提」であると解されうること、もうひとつは、プラトンはこの探究が破綻という結果に終わること、あるいはこの探究をそのような結果に終わらせることを想定してこのような前提を置き、ソクラテスとテアイテトスの探究を困難に陥らせたということである。そしてこの条件が仮設の前提と言えるなら、この探究は、仮設の前提に基づいた探究であるといえよう。

プラトンにとってみれば、知識は想起により獲得できるものである（もちろん、『テアイテトス』執筆時点でプラトンが想起説を捨てていないとすれば——という前提のもとでの話ということになるが）。その文脈で虚偽の思いなしの成立可能性について説明するならば、虚偽は知識を思い出す以前の状態において成立することになる。それはおそらく『メノン』において、その冒頭から探究のパラドクスが提示される前までのメノンにより繰り返された誤答の数々⁸や、メノンに仕える召使の少年との幾何学の問題を扱った想起の実演において少年が述べた誤答がそれに該当するといえよう。プラトンにとって、「学ぶ」とか「忘れる」ということを含まないという前提を置くことは、自身の知識獲得理論である想起説を用いずに虚偽の思いなしの成立の

可能性の探究をすることになる。

あえて想起説に言及できないような制約が置かれたことには、何か意味があるのだろうか。この点に関して、Cornford⁽⁹⁾は、「この議論全体は、プラトン自身のものではない特定の基本的前提により制限されている。プラトンは他の人による虚偽の思いなしの存在を説明する試みに批判的であり、結論は否定的なものである。これら前提が置かれている限り、議論は失敗するし、失敗せざるをえない」と解する。またこのCornfordの言及を引き合いに出しつつChappell⁽¹⁰⁾は、プラトンはこの議論が虚偽の思いなしの成立の可能性の説明として望み薄であることを説明しようとしていると解する。おそらく、このような解釈は妥当なものであろう。そのような解釈は、先にも言及したような仮設の前提に基づく探究が、この箇所においてなされていることを踏まえることで可能となろう。そのような解釈は、すなわち、このような仮設の前提に基づいて探究を行った結果、この仮説に基づいたならば虚偽の思いなしは成立しえないという結論に至ることで、この仮設の前提が誤りであることが明らかとなるということをプラトンが見越していたという解釈に通じるものであろう。とはいえ、CornfordもChappellも、そのような言及は行っていないけれども。

さらには、先に挙げた188aにおけるソクラテスの発言については、仮設の前提を置くことに関して、『メノン』におけるような前提の置き方に通じるようなかたちで、この前提を「さしあたり問題の外に」という条件付けをつけて置いている点からも、そう解することができるように思われる。だが、想起説に繋がりうるような要素を除き「知っている」と「知らない」だけを用いるというこの前提に基づくならば探究は困難に陥ることをプラトンが見越していたと解することは、はたして妥当だろうかという疑問は完全には払拭されてはいないだろう。たしかに仮設の前提に基づく探究においては、帰結が誤りであるなら置かれた前提が誤りであるが、それ以上のことをプラトンが想定していなかったとすれば、前提を置き直せばいいだけのことでありともいえる。

そのような状況で異なる仮設の前提を置き、そして対話をする双方が合意する結論に到達したならば、おそらくは『メノン』87b以降で展開される「徳が知識なら徳は教えられうる」という仮設の前提に基づいた探究のように、問答は進められるように思われる。この箇所では、89cにおいて一旦はメノンとソクラテスの双方が認める結

論にまで行き着く。その直後に、ソクラテスは「しかしひょっとして、我々がそのようなに同意したのは正しくなかったのではあるまいね」と述べる。そして 89d において「もし徳が知識であるならば人に教えることができることについては取り消すようなことはしない。問題は、そもそも徳が知識であるかどうかということであって……」と、仮設の前提を問い始める。『メノン』においては、一旦は双方が認める結論に行き着くものの、仮設の前提への疑義がソクラテスから出され、探究が続けられる。そして探究が続けられ、メノンは困難に陥り 96d において「もうさっぱりわかりません」と述べる。『テアイテス』第二部における問答は、このような展開とはなっていないけれども、異なる仮説に基づいた探究により、ソクラテスとテアイテスの双方が合意できる結論に至ったとするならば、次はその仮説に関する検討がなされることになるだろう。

プラトンは、この箇所において、そのような展開ではなく、矛盾した帰結に至り探究が困難に陥るような展開となるように執筆している。それは、プラトンが矛盾した帰結に至り困難に陥ることを見越しつつ執筆していたからであるようにも思われる。それを探る鍵は、ここでの探究が間接的証明となっているかどうかという点にあるように思われる。

5 間接的証明かどうか

Szabo⁽¹¹⁾は、仮説が哲学問答においてどのように用いられているかということに関して、次のように解している。プラトン自身が自身の証明手続きを数学者の流儀に従っていることに関しては『テアイテス』162e において言及されている。この箇所ではソクラテスは「もしこれをテオドロスや誰か他の幾何学者が使用して幾何学を行おうとすれば、その男は、何ひとつのことにさえ値しないものであるだろう。だから、君とテオドロスは、かくも重大な事柄について語られた言論を、蓋然的な推論ともっともらしさによって受容しているのではないか、検討しなければならぬのだ」と述べている。このソクラテスの発言から数学の流儀に従っていることをプラトンが述べていると、Szabo は解する。その上で、Szabo は、163a-164b における「知識と感覚は同一か異なるか」という問いの検討に際し「知識と感覚を同一だと仮定すると、見ることも

感覚の一種なのだから、見ることと知ることもまた同一でなければならぬだろう」とされ、議論が展開される箇所を参照する。その後、この議論は「知識と感覚を同一視するならば、そこから何かありえないこと ($\tau\acute{\omega}\nu \acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$) が生ずるように思われる」(164b) と結論付けられることに言及する。そして Szabo は、ここでプラトンが $\acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$ という語を用いていることを指摘する。また、この語はエウクレイデスにおいては、間接的証明の手続きを締めくくる際の $\acute{\omicron}\pi\epsilon\tau\epsilon\tau\iota\nu \acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$ のことであるとす

る。おそらく、Szabo の解釈のように、仮説を置き、そこから探究を始め、不可能なことが帰結したことにより $\acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$ をそのような間接的証明が帰結されたという意味で用いることを意図して、この箇所においてこのような問答をプラトンが執筆したと解することは、妥当であろう。そしてそれは、ソクラテスの対話の相手が数学者であるテアイテスとテオドロスである『テアイテス』という、この同じ対話篇で展開される問答であれば、もし $\acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$ という語を探究の帰結で用いている箇所があるとすれば、162e-164b においてのみでなく、それ以外の箇所においても、間接的証明の方法を用いた探究が行われていると解することは、無理筋ではないともいえるだろう。

このような展開は、第二部においても同様のものとして現れる。虚偽の思いなしの成立の可能性の検討の帰結において

ソクラテス 「これ(虚偽の思いなしの成立はいかにして可能であるか、ということ。

引用者注) を分かることは不可能である ($\acute{\epsilon}\sigma\tau\iota\nu \acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$)、知識が何であるかを十分に分かるまでは」(200d)

とソクラテスは述べ、この探究が不発に終わったことが述べられる。ここでの「不可能である」($\acute{\epsilon}\sigma\tau\iota\nu \acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$) は、「すべての間接的証明の手続きを締めくくる終結形式である $\acute{\omicron}\pi\epsilon\tau\epsilon\tau\iota\nu \acute{\alpha}\delta\upsilon\nu\alpha\tau\omicron\nu$ なのである」と Szabo⁽¹²⁾ が述べているものであると解してよいだろう。

ここまでの検討により、第二部での虚偽の思いなしの成立可能性についての探究は、仮設の前提に基づく探究であり、さらには間接的証明であると解釈することは、妥当であることが示されたといえよう。

ここまできて、次の疑問を検討できるようになったといえよう。それは「なぜこのような探究がこの箇所で行われるような展開として、プラトンは『テアイテス』第二部を執筆したのか」という問いである。

6 間接的証明、そしてプラトンにおける数学と哲学

このような探究がこの箇所でのようなかたちで検討されていることに関して、諸解釈者はそれぞれに解釈を展開している。たとえば、Sedley⁽¹³⁾は、それは、ひとつにはソフィスト的な議論との区別のため、特にプロタゴラス説に対する反論として、誤るということを示すため、そしてもうひとつとしては『ソピステス』においてプラトン自身による最終的な解釈の予告をするためであると解する。たしかに、この Sedley の解釈は、ある意味で妥当であるように思われる。前者に関しては、第一部においてプロタゴラスを引き合いに出した問答がなされること、その箇所においても虚偽の思いなしに言及していること (170b-171d) と、第二部冒頭でのソクラテスとテアイテスの会話において第一部のその箇所との関連が仄めかされていることを考慮すれば、この解釈は妥当であろう。また、後者に関しても、『テアイテス』と『ソピステス』が物語として続きものになっていることは明らかであるから、そうであれば何らかの仄めかしがあってもおかしくはないと思われる⁽¹⁴⁾。

McDowell⁽¹⁵⁾は、『テアイテス』の主題が知識とは何かを探るものであること、そしてその候補として出された真なる思いなしが知識であるという新しい主張を理解するためには、同時に虚偽の思いなしについて理解できなければならないからであると、その理由について解する。たしかに、『テアイテス』における主題は「知識とは何か」であるし、第二部において検討されるのは真なる思いなしが知識であるかどうかである。思いなしの真であるものが対象になるのであれば、その真偽が（それゆえすなわち偽なる思いなしの可能性も）問題となることはたしかであろう。とはいえ、McDowell はそのような当たり前のことしか述べておらず、その検討がどのようなものであるか、そしてその先にあるものがどのようなものであるかについての検討が足りないといえよう。

また Burnyeat⁽¹⁶⁾は、ひとつには人は通常誤りうるものであるということ、そして

テアイテトスによる真なる思いなしが知識であるという主張は、虚偽を思いなすことは不可能であるということを示す虚偽の思いなしは、虚偽を思いなすことが可能であることを我々に思い至らしめる虚偽の思いなし以外の何物でもないということを示しているのだと解する。この解釈は妥当ではある。ただし、Burnyeatはこの解釈が、虚偽の思いなしの成立可能性の探究が間接的証明となっていること、さらにはこの箇所の議論が仮設の前提に基づいた探究であること、そしてそうであるがゆえにそのように解釈できることに関しては特に何も述べていない。この点に関しては物足りないといえよう。

これらの解釈は、どれもある程度の妥当性を有しているように思われる。また、先に挙げたように、Cornford⁽¹⁷⁾は、プラトン自身のものではない特定の基本的前提により制限されている点に言及しており、この点に関してはやはり妥当な解釈であるといえる。しかし、ここでの問答が仮設の前提に基づく探究であり間接的証明である点に言及していない点において、これらの解釈に対しては、どれも不足感は否めない。

プラトンにおいて知識とはアイデアであるのだから、「真なる思いなしが知識である」という主張は、プラトンが与しない立場である。真なる思いなしのレベルは、『国家』における線分の比喩を引き合いに出せば、*διάνοια* のレベルであり、数学の探究のレベルである。プラトンは、真なる思いなしが知識ではありえないことを承知した上で、思いなしに関わる探究を行ったと解することもできよう。そして、そのようなレベルの探究であるのだから、しかもプラトンにとって真なる思いなしが知識であるというのは誤った前提であるのだから、探究の結末は矛盾した帰結となることが予想される。そうであるがゆえ、プラトンは数学の証明の方法である間接的証明の手法を用いて行ったと推測することも、全く的を外れではないように思われる。それは、この対話篇の主要登場人物がテオドロスとテアイテトスという二人の偉大な数学者であることから推測されよう。

テアイテトスは、テオドロスが $\sqrt{17}$ まで示したところでやめてしまった通約不能な数に関する証明に成功したとされる(147c-148b)若き天才数学者である。そのような数学における探究を十全に行うことができるテアイテトスがソクラテスと行う問答は、数学の探究のレベルか、あるいはそれ以上のレベルの探究であると解することもできよう。それは、ソクラテスにより、その証明問題が「ちょうどよい下地」(148d)

とされたり、ソクラテスの産婆術への言及（148e-151d）の際に、テアイテトスの中には何か産みたいもののお腹の中にあるとされたりする（151b）ことから窺い知ることができるといえよう⁽¹⁸⁾。

プラトンにおける哲学探究が数学と密接な関係にあることは、『メノン』における想起説や仮設の前提に基づく探究⁽¹⁹⁾、『パイドン』における魂の浄化に関する問答（64e-66a）の際に *διάνοια* 系の語や *λογισμός* 系の語が多く用いられていること⁽²⁰⁾、また想起説において「等しさそのもの」への言及がなされる際には数学的等しさに言及されていること（74b）⁽²¹⁾、『国家』における線分の比喻——等を見れば明らかである。そして『テアイテトス』も、プラトンの知識獲得のための哲学探究の系譜の上であり、さらには、哲学探究における数学の探究の方法が活用されている対話篇であるといえる。

プラトンの哲学探究は、特に中期以降においては、数学の探究の影響が強くみられる。『テアイテトス』第二部における虚偽の思いなしの成立の可能性に関する検討において間接的証明の方法が用いられる等、それが強くみられることは、ここまでで見てきたとおりである。そして特に、この第二部で間接的証明が用いられるのは、「何であるか」の探究のために挙げられた候補（『テアイテトス』第二部においては「真なる思いなし」）に関する検討が、「何でないか」の検討という側面を有しているということでもあると解することもできよう。それはすなわち、矛盾する帰結に至ることによってその前提が誤りであることを示すことにより、無矛盾であるような前提あるいは仮説を置くための次の試みがなされることを促すことでもあるともいえよう。それは、『テアイテトス』においては対話篇全体を通じて、知識とは何かという問いの答えとして、感覚、真なる思いなし、真なる思いなしにロゴスが付け加えられたものという三つの候補がテアイテトスにより挙げられるものの、哲学問答の結果、それらはどれも斥けられることから明らかであるといえよう。もちろん、その他にも、たとえば『メノン』において、冒頭でのソクラテスによる「徳とは何か」の問いに対して、メノンが「男の徳は……女の徳は……」と述べたり、それに続く検討の中で、正義は徳のひとつであると述べたり、立派なものを欲求してこれを獲得する能力であると述べたりするが、それら候補が、問答の結果、ことごとく誤りであるという帰結に至ることからも明らかであるといえよう。

それは、対話篇における場面設定や状況等に間接的にも表現されているようにも思

われる。たとえば『メノン』であれ『テアイテトス』であれ、対話篇の最後にソクラテスが「君の方は……このアニュトスを説得⁽²²⁾して……」とか「明日もう一度ここに集まるとしましょう」とかといった、対話篇の後のことへの仄めかしにおいて、それが暗示されているともいえよう。

プラトンの対話篇において、対話の相手が提示する答えが吟味に耐えられず困難に陥るというソクラテスの問答法の影響があることはもちろんである。中期以降の対話篇、特に本論文で扱った『テアイテトス』において、ここまでの考察で扱ってきたような問答において、そのような仕方では探究がなされているのは、ソクラテスの問答法に加えて、プラトン自身が影響を受けた数学の探究の方法をそこに加味しつつ、展開されたものであるからであるといえよう。そしてそれは、プラトンが間接的証明そして数学の探究の方法を哲学探究において有用であると肯定的に評価していることのひとつの現れでもあるように思われる⁽²³⁾。

7 まとめ

以上により、『テアイテトス』第二部における虚偽の思いなしの成立の可能性に関する検討の哲学的意味と、プラトンにおける数学と哲学の関わり的一端が、示された。

註

- (1) これが実演なのか比喩的な例示であるのかは解釈が分かれるが、実際にある幾何学の、わりあい簡単な問題を扱い、少年はソクラテスとの問答のはてに、正解に到達することはたしかである。
- (2) 根拠の思考 (ἀπὸ αὐτῶν λογισμός) の λογισμός の基本的な意味は計算や演算である。
- (3) 172c-173b における法廷を徘徊しつづけている者と知恵の探究をする者の比較の箇所を意識しての発言であると解されよう。また、虚偽の思いなしの成立の可能性に関する問答の後に提示される法廷における例にも関わってくる発言であるとも解されよう。

- (4) McDowell(p.194)も指摘しているように、173b-177cにおけるソクラテスとテオドロスによる対話を念頭に置いたものであると思われる。
- (5) ソクラテスとテオドロスによる問答（173b-177c）においては、知を求めるものとそうでない者との対比がなされ、知を愛し求めるものがそうでない者を高みへ引っ張り上げ、そして正しさや幸福といったもののものそのものに関する考察をするとなった場合に、そうでない者はまごついてしまうという寓話的な内容が述べられたり、神まねびにより思慮のある人間になろうと努めることについて述べられたりする。
- (6) 『メノン』のこの箇所以外にも、『国家』（437a）『クラテュロス』（436d）『パイドン』（107b）等においても同様のことが言われる。この点に関して、また『メノン』の仮設の前提に基づく探究に関する詳細な検討は、松井（2007）を参照せよ。
- (7) Szabo, p.234
- (8) 召使の少年とは異なり、メノンは、ソクラテスとの問答において、最終的に「徳とは何か」の正しい答えを見つけることができなかった（それはすなわち想起することができなかった——といってもよいかもしれない）が、問答の中で誤答を述べていることはたしかである。では、メノンは召使の少年のように、『メノン』において想起を始めているかという点に関しては、ここでは扱わないが、問題としては残るだろう。
- (9) Cornford, p.111
- (10) Chappell, p.152
- (11) Szabo, pp.240-241
- (12) Szabo, p.241
- (13) Sedley, p.119
- (14) とはいえ、後者に関しては、プラトンはそれぞれの対話篇において、異なる探究のレベルで同じ問題を扱っているとも解されよう。というのも、『ソピステス』においては、『テアイテトス』におけるソクラテスとテアイテトスとの対話とは異なり、エレアからの客人とテアイテトスの対話は、哲学のレベルの探究であるといえるからである。エレアからの客人が架空の登場人物であり、『ソピステス』冒頭において、パルメニデスとゼノン門下であり哲学に通じているとテオドロスによ

り紹介されることも、この両者の探究のレベルの違いを考えるヒントとなるように思われる。

(15) McDowell, p.194

(16) Burnyeat, p.66

(17) Cornford, p.111

(18) 想起説とソクラテスの産婆術の関係についてはここでは扱わないが、次のような違いであるとする解釈の展望を述べておくこととする。想起はソクラテスと哲学問答をする相手がアイデアの知識を獲得する営みであり、想起説はそれの説明である。それに対して産婆術はアイデアの知識を獲得する対話の相手を助けるソクラテスについて述べられたものである。ソクラテスとの哲学問答をする人がアイデアの知識をどのように成功的に獲得するのかを述べることは、知識獲得に関して直接説明することである。これは想起説である。それに対して、哲学問答によりアイデアの知識を獲得することを手助けする人、すなわちソクラテスについて述べることは、知識獲得に関して直接説明することではない。このことを考慮すれば、産婆術は、哲学問答によりアイデアの知識を獲得することに関するありそうな暗喩であるといえる。これは、ソクラテスと対話の相手によりなされている哲学問答の状況を、ソクラテスの側から見るか、対話の相手の側から見るかの違いであるともいえよう。この解釈の方向性が妥当であるならば、テアイテトスの中には想起が成功的になされればそれにより思い出されることになる知識があるということになる。そうであれば、プラトンは、やはり、『テアイテトス』執筆の時点において、想起説を捨ててはいないということになる。

(19) この問題に関する詳細については、松井（2007）を参照せよ。

(20) この問題に関する詳細については、松井（2018）を参照せよ。

(21) この問題に関する詳細については、松井（2004）を参照せよ。

(22) この箇所における「説得」がどのようなものであるかについては、ゴルギアスの説得術であるのか、あるいはソクラテスとの問答により学んだ哲学問答によるものであるのかといった点に関して、検討の必要があるが、本論文の主題に直接かわるものではないので、今回はその問題には踏み込まない。

(23) この点に関しての詳細な検討は紙幅の都合により行わない。今後の課題となろう。

参考文献

Burnyeat, M. *The Theaetetus of Plato*, Hackett, 1990

Chappell, T. *Reading Plato's Theaetetus*, Hackett, 2005

Cornford, F.M. *Plato's Theory of Knowledge*, Macmillan, 1957

McDowell, J. *Plato Theaetetus*, Clarendon, 1973

Szabo, A. *The Beginnings of Greek Mathematics*, D. Reidel Publishing, 1978

Sedley, *The Midwife of Platonism*, Oxford, 2004

松井貴英「想起と数学」『哲学』55号、243-255頁、2004年

———『プラトン知識論の研究』博士論文、2007年

———「プラトン『パイドン』における死の練習と哲学探求について」『名大哲学論集』田村均先生ご退職記念特別号、143-156頁、2018年